

富山薬窓会首都圏支部

目 次

ごあいさつ	(58、46年卒)加藤 健二	1
15年 首都圏薬窓会総会		2
平成16年度「首都圏総会」のご案内		3
本部便り 国立大学法人化、再編・統合と 薬剤師教育年限延長	(薬学部長) 倉石 泰	3
話題提供 「娘の発病から6年半」 作業所ができました	(58、46年卒)千田 耕平	4~5
出版のお知らせ 「古代エジプトの秘薬」について	(60、48年卒)千田 豊子	5
音楽の道でもあるシルクロード	(38、25年卒)深井 三郎	5~6
100字通信 1	(39、26年卒)大澤 弥生	6~7
同期生箱根登山	(47、35年卒)並木 英明	8
エベレスト街道トレッキング... 最高峰へ30kmにまで迫る	(48、36年卒)久保 一夫	9
桔梗会便り	(50、38年卒)前田 一郎	9~11
100字通信 2	(53、41年卒)深田 和代	11~12
俳写 花の散歩みち		12
第64、65回薬窓会ゴルフコンペ戦評	(43、31年卒)木谷 健一	12
100字通信 3	(40、28年卒)千原 秀夫	13~14
平成15年度支部活動報告		14
富山薬窓会首都圏支部資産状況		15
物故者		15
富山薬窓会首都圏支部会則		16~17
平成15年度 富山薬窓会 首都圏支部 年会費 納入者一覧		18~20
平成15年度会計報告、16年度予算(案)		21

ごあいさつ



首都圏支部長 (58、46年卒) 加藤 健二

はじめに

新緑の若葉がまぶしくひかる季節となりました。

首都圏支部の皆様にはお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年6月の首都圏支部総会において、前支部長庄司孝市様より支部長の大役をおおせつかり、早1年をすぎようとしております。

この間、学年幹事の皆様のご了解をいただき、現在千人を超える薬窓会首都圏の皆様への連絡等の事務作業を委託させていただきました。

またインターネットの利用を進め、おかげさまで支部活動の前進を少し広げることができました。支部活動へのご意見、ご要望ありましたら事務局代行のアサヒ興行株式会社へメールないしはお手紙をいただければ役員・学年幹事へ伝達されるようになっております。

今後とも会員皆様のご指導とご協力をいただきたくお願い申し上げます。

さて、私たち薬剤師をとりまく環境が急激に変化しつつあります。

教育の分野では「薬剤師6年生」と20校にもものぼる「薬科大学の増設」薬事法の規制緩和では「医薬部外品」による旧医薬品の販売および夜間店頭販売の「薬剤師テレビ指導」行政関係では「大学の統合」と「独立行政法人」への移行等々の複雑でかつ重大な問題が過去には想像もできないスピードで押し寄せて来ています。

富山本学において、私たちの母校も目に見える変化、目には見えにくい変化を含め急激に変わりつつあります。

6月12日3時からの「首都圏総会」(東京駅ルビーホール)において、学内幹事津田教授、薬窓会松井会長様よりこれらの様子をお伺いする予定となっております。

また当日の「話題提供」は昨年野口英世賞を受けられた高津聖志様(42年卒 現東大教授)に免疫のお話をお願いしています。

多数の皆様の参加をお待ちしています。

最後になりましたが、会員皆様のご健勝とご活躍お祈り申し上げます。

15年 首都圏薬窓会総会

15年6月28日の総会は、皆様の要望から二次会が持ちやすい東京駅の11、12階の「ルビーホール」で開かれました。

富山より来ていただいた学内常任理事の津田教授(衛生・生物化学講座)は、大学の現況のお話と津田研究室のご紹介をいただきました。

富山本部からは新薬窓会会長の松井氏(テイカ製薬社長) および近畿支部からは支部長の勝山氏(46年卒)が出席され、ご挨拶を頂きました。

津田先生の大学報告では、やはり平成17年実施の大学の再編・統合にむけてのさまざまな問題や、独立法人の問題が出されました。なお、平成15年度国家試験の結果については良い結果であった旨を話されました。津田研究室のスライドを使った研究のお話は、しばし学生になったような錯覚を覚えた興味あるものでした。

松井会長は、この4月に前森会長からバトンタッチされて富山支部長から薬窓会新会長になられました。

本部組織の問題、資料館建設のこと、大学再編統合問題、和漢薬研究所の存亡問題など数多く、かつ多難な課題を背負ってますが、本部および各支部活動の活発化にむけて努力したい旨決意を述べられました。

近畿支部の勝山氏からは、支部の近況や新しい取り組み(欠席者への総会資料の送付、女性部会の発足など)を述べられ、近畿の様子について参考となる話題でした。

議事に移り、14年度活動報告や会計報告、15年度予算および会則改正が審議され、近畿支部との交流、首都圏五福会への参加、ゴル

フ同好会活動と代表の千原氏の辞任が報告され(ゴルフは16年も継続活動ですのでご安心ください)ました。

新支部長に加藤氏(58回卒)および新幹事(挨拶に記述)が選任されました。

「話題提供」は政府の「健康日本21推進フォーラム」事務局で46年卒の末木一夫氏による、治療から予防の時代へ、セルフメデイケーションへ時代の変化をお話いただきました。

生活習慣病の中でも主に、隠れ患者が多く合併症が怖い糖尿病についてスライドや資料を使ってわかりやすく説明されました。

糖尿病を予防するために、五つの「生活習慣」を変えねばなりません。

- 1、禁煙
- 2、適量のアルコール摂取
- 3、1日30分以上の運動
- 4、BMI 25以下
- 5、低脂肪高食物繊維食である。

耳の痛い人がたくさんいるかもしれない。医薬に従事する人は良いお手本になることが求められています。

学校に自動販売機を置かないように提言しているが、コーラの会社からの反発があるとのこと。企業の儲け優先では健康日本21は推進できない。


糖尿病のオーダーメイド医療にもふれられ皆様のうなづく姿がありました。(残り時間のお話はヨーロッパアルプスの壮大なスライドによって心の健康?となりました)

最後は恒例の懇親会ですが、ルビーホールでは部屋を変えるだけで時間のロスなく懇親会へ移りたいへん便利でした。

それぞれのお話と思い出を持って15年度総会を終えることができました。

平成16年度 「首都圏総会」のご案内

日時：平成16年6月12日（土）午後3：00～
場所：東京駅ルビーホール

「話題提供」に昨年野口英世賞を受けられた高津聖志様（42年卒 - 現東大教授）に免疫のお話をお願いしています。



高津聖志さん野口英世賞を受賞

15年11月7日野口記念館（東京信濃町）において行われた授賞式の一コマです。

この賞は「免疫、感染症」の分野で多大な貢献のあった人に贈られる賞で、高津さんは「インターロイキン5」の発見の成果が認められたものです。

本部便り

国立大学法人化、再編・統合と薬剤師教育年限延長

薬学部長 倉石 泰

富山薬窓会の皆様には、薬学部の教育・研究にご協力をいただき感謝いたしております。

さて、この「首都圏遠久朶」が発行されます4月には、国立大学の法人化がスタートします。学生にとっては、当面は大きな影響はないと思われませんが、教職員は非公務員になることで、労働基準監督署の監督・指導を受けることとなります。そのために、就業規則や安全衛生規程など数十もの新たな規則の作成などに追われています。法人の運営に関しては、16年度は従来通りの金額が文科省から交付される予定ですが、17年度以降は、本学で毎年5～7千万円程度交付金が減額されるようです。教育・研究のレベルを維持しながら交付金減額にいかに対処するかが、法人首脳部の最大の課題になりそうです。

本学は、13年秋以来、富山大学・高岡短期大学との再編・統合に多くの時間と労力を費やしてきました。昨年5月に統合の合意に達した後は、時間と労力の多くを法人化の準備に費やしています。統合に向けて解決しなければならない課題が多く残されていますので、予定通り17年10月に統合するには、法人スタート時から、統合に向けた作業を急ピッチで進めなければならない状況です。薬学部にとって、統合時に実現したい最大の課題が部局化（大学院担当教員が学部教育も担当する体制）です。他の国立大学薬学部は、旧帝大が大学院重点化され、他の薬学部も既に部局化されるか部局化計画が承認されています。ほとんどが医学部と組んで部局化されていますので、本学薬学部もその計画ですが、残念ながら、まだ医学部との温度差が縮まっ

ていません。

3つ目の大きな課題が薬学部の年限延長問題です。薬剤師教育の充実と薬剤師の地位向上を主な目的に、薬学部6年制化が叫ばれてきました。今年の通常国会に、学校教育法改正案と薬剤師法改正案が上程される予定です。現在残されている問題は、薬剤師国家試験受験資格の付与を6年制薬学部卒業者に限定するか、4年制薬学部と更に2年制薬学修士課程を修了した者にも認めるかです。文科省では後者の制度も認める方向ですが、厚労省は前者に限定することを主張していき、現在、両者で協議中です。どちらの制度になるにせよ、現在の臨床薬学専攻修士課程の16名の学生に課しています6ヶ月実習を、約100名程度の学生に課することになります。この問題は、本学の部局化にも影響を及ぼしますので、どのような体制がよいか検討しています。

最近では、本来の仕事である教育・研究とは別の仕事にも頭と時間を使うことの多い毎日です。継続的改革は必要なことですが、対処すべき問題があまりにも多く、むしろ大学の機能低下を招くことを危惧しています。

話題提供

「娘の発病から6年半」 作業所ができました

(58、46年卒) 千 田 耕 平

(60、48年卒) 千 田 豊 子

娘志保子の発病から、6年半。本年10月1日、都・区の認定を受け、新高島平にAランク精神障害者共同作業所 を立ち上げることができました。

これまで、多くの方々から色んなかたちでご支援をいただき、本当に嬉しいかぎりです。

今回、首都圏同窓会代表加藤さんから、私たちのことを文章にとの依頼を受け、素直にご支援と受け止め、私事ながら一筆執らせていただきます。

『私、宇宙人かもしれない。』電話の向こうから志保子の最初の異変を告げられました。妻と志保子、そしておばあちゃんが初めての中国へ海外旅行に行った時のことです。

志保子が高校2年を迎える春のことでした。

当日は、身体が震え、気が動転して、ただただ娘を抱きしめているだけでした。

結局、奇しくも私が勤務したことがある墨東病院(東部地区精神科救急指定病院)に救急入院となってしまいました。

3ヶ月の入院の後、不安を残しながらも退院、高校への復帰を果たしました。

当時、大久保病院にいた私は、娘の通学と同方向で、全く精気を失った娘の寝起き顔を見ながら、不安いっぱい朝の通勤をともにしていました。

しかし、不幸はこの病気にとどまらず、副作用というもう一つの重い課題を突きつけて来ました。

2年が経過し、私たちも当初の混乱から抜け出しかけている時、志保子の首が曲がり始め、1年かけて、すっかり90度にも曲がってしまいました(遅発性ジストニア)。

この1年は、私の頭の中は志保子でいっぱいになり、東奔西走、情報集めにと飛び回りました。そして、集めた情報をもとに医師に処方方を指示するくらいでした。

この後、『ジストニア』というホームページを立ち上げましたが、この時の経験を踏まえた当時の私の叫びです。

日本の精神医療は、ほとんど当てに出来ないとの思いから、世界にも発信して専門家の意見が欲しい、と考えだけは壮大なものです。そして、この必死の活動が今日の作業所立ち

上げの基盤にもなっています。

この頃の志保子は、統合失調症と斜頸、口周囲のジスキネジアなどで、一緒に出かけるのはばか様なありさまでした。幼児はお化けでもみるように強張った顔をみせ、おばさんの中には覗き込んでくる人もいました。

ある時、整形外科を訪れると、まるで見世物のように写真をとっただけでした。

とにかく、負けまいと、虚勢をはって出来るだけ志保子と外に出て行きました。

今振り返ると、毎日が、極限まで張り詰めた日々だったと思います。その後、首はボツリヌス治療でずいぶん改善していますが、肝心の病気の方は芳しい改善をみていません。

志保子は、本当は毎日何を思って生きているのだろうか。忙しい(忙しくしている)毎日の中で、ふっと考えてしまう瞬間があります。

今は、天より精神障害という人生の良きテーマを頂き、24時間この仕事をする決めています。志保子がくれた充実した毎日です。

さて、私の役目は、誤解の多い精神障害について皆様に伝えることとと思っていましたが、久しぶりに発病のころを思い出し、気持ちが高ぶってしまいました。

唐突なお手紙、驚かれた方も多いことでしょう。精神障害者を抱える親の苦悩が少し伝われば、それも良しとしてください。

板橋区高島平4-1-13 TEL : 03-3975-3824

出版のお知らせ

(㉝、25年卒) 深井 三郎

日本の新薬変遷史 CD-ROM (1900~2003)

深井 三郎 著

A4版 約900ページ分を収録

発行 株式会社

定価 本体28,500円(税別)

医療の現場での新薬の出会いから、新薬の生い立ちに興味をいただき、1974年に新薬を薬効・年次別にまとめ「今日の新薬」を発刊しました。その後、版を重ねて1995年に第6版(近代医薬品の変遷)ができました。このたび、これらを集大成した本著が完成しました。薬効群は中枢神経系用薬【8711】から、アルカロイド系麻薬(天然麻薬)【8781】までを網羅しています。薬効群の一つとして化学療法剤【8762】の概要を取り上げてみました。

1910年：ヒ素化合物の梅毒特効薬サルバルサン開発。

1930年代：サルファ剤開発。1940年代～易溶型、1950年代～持続型。1979年、再評価で適応が制限された。

1940年代：ニトロフラン誘導體開発。1977年の再評価で有用性なしと判定。

1960年代：ピリドンカルボン酸系ナリジクス酸(NA)開発。

1970年代：NA耐性菌用製剤が国産で開発。

1980年代：広範囲経口抗菌剤ニューキノロン系製剤開発。

1990年代：ニューキノロン製剤の持続型、中枢毒性や相互作用軽減の製剤開発。

「古代エジプトの秘薬」 について

(㉞、26年卒) 大澤 弥生

私は昨年3月「古代エジプトの秘薬」という本を出版しました。この本は、私の1学級上の飛永精照先輩が、日頃収集されていた本のうちの一つである「A Dictionary of Pharaonic Medicine」を当時、昭和薬科大学の学長になられ多忙で読む暇が無いからと勧められたのですが、読み終わる頃には、すっかり古代エジプトの医学に魅せられてしま

い、文中の本「Grundriss der Medizin der alten Agypter」も是非とも読みたいとなり、ケンブリッジ大学の図書館にあることを知って出掛け、読んで、この二冊を底本に書いたものです。

象形文字で書かれた、紀元前三千年の昔からの何冊もの医学古書が残存しており、ピラミッドを建てた人達やアブシンヘル宮殿に住んでいた人達も使ったであろう古書の中の薬は、彼らを悩ませたあらゆる病気、頭痛、腹痛、歯痛、皮膚、目の病気、はげ頭、白髪、若返りの薬からバイアグラまで対応しており、又、彼等の建造物同様にカルチャーショックを与える物ですが、私を魅了したのは、それが立派に現代の薬に受け継がれていることでした。

音楽の道でもあるシルクロード

(47、35年卒)並木英明

シルクロード！=絹の道 この美しい響きのある名前をもった道は、古代から中国を中心とする東とギリシャ・ローマをはじめとする西との文化、宗教、芸術、科学等の交流をつかさどる世界の道であった。この交流の軌跡の結果として幾多の戦も行われた。

世界史を学んだ高校時代より是非ともいつてみたいところであったので、チャンスを狙っていた。9月から10月にかけてやっと思うことが出来た。

シルクロードというと、直ちに敦煌を連想するのが通常ですが、今回の旅は敦煌を飛び越えて更に西に行った。「...西のかた陽関を出ずれば故人なからん」と詠われた陽関は敦煌のやや西にあり西域への出発点といわれている。

中国西域(新疆ウイグル自治地区)はタクラマカン砂漠と天山山脈という難所があり、か

つ、古代、中世などその時代に応じてオアシス国家を結ぶシルクロードのメインルートは換わっているため、シルクロードには3つのルートが現存している。一つは天山山脈の北を通る天山北路、二つ目は天山山脈の南で、しかもタクラマカン砂漠の北を通る西域北路(天山南路とも言う)、三つ目はタクラマカン砂漠の南を通る西域南路である。

今回の旅行行程を簡単に述べると成田 重慶 ウルムチ、そしてウルムチからガシュガルまでも飛行機で飛び、そこで3泊し、その後バスで西域南道を東向きにガシュガル ホータン ニアまで走る。ニアはタクラマカン砂漠南辺のほぼ中央に位置するオアシスである。ニアからはタクラマカン砂漠南北縦断の砂漠公路を北に向かいクチャへ。各地でそれぞれ一泊ずつ。クチャから天山南路(西域北路)をコルラまでもバスで。コルラからは天山山脈を縫って走る南疆鉄道でトルファンへ。トルファンで二泊。そしてウルムチまで再度バスで行きそこから重慶経由で成田に帰るという13日間の旅である。

大きな自然、そこに住む多くの民族とその風習、発展の程度、宗教的なもの、その他諸々等観るものすごく多かった。これらの各項目についてふれることは紙面も許さない。

そこで、一つの側面として、音楽の面に絞ってみたい。

結論として、音楽が盛んで、生活に密着しているということである。

旅行の最初から驚かされた。二日目、重慶からウルムチに飛び、ウルムチを観光後その日のうちに中国西域の、その最西端の都市ガシュガルに最夜中12時(中国時間)に着くという強行スケジュール。ホテルとなっている旧ソ連領事館の庭には天にも届くような高いポプラがあるのが、真っ暗でその時点では見えない。わずかな明かりを灯して、こんな時間に、現地の歌と踊りで我々20名の一行を迎え

てくれたのである。

また、ガシュガルのバザールなどを覗いてみると、楽器店が数カ所にある。大きそうな店に入ってみると、店員が弦楽器で演奏をしている。居合わせた客が皆、名演奏に聴き入っていた。それが終わって私もと思い、管楽器を手に持った。一発でいい音は出た。楽器は、管楽器や打楽器もあるが、弦楽器が多かった。

また、予定された行程の中に幼稚園訪問というのがあった。漢民族以外の民族、即ちウイグル人等多数の民族の子供たちが入園している幼稚園であり、園児たちが我々を歓迎して歌って、踊って見せてくれた。それが、うまいのなんの！テンポの早い中東風のリズムに身体全体で乗っているという感じである。真夜中のホテルでの歓迎の時もそうであった。

なぜこんなに音楽に親しんでいるか？ そのわけは旅行している間にわかってきた。

もっとも人口の多いウイグル人をはじめとして西域の人達は古代から音楽が好きであったという証拠が、古代の石窟の中に残っているということである。

タクラマカン砂漠縦断公路を北に行った、天山山脈の南に位置するクチャ(漢語で亀茲(キジ)と言う)は、7世紀初めに有名な玄奘三蔵が訪れた亀茲国(クチャ)で、他のオアシス国家と比べて格段の規模と豊かさを誇り、人口も最盛期は8万あったといわれる。そこから西域北路(天山南路)を西北60kmほど行った所にキジル千仏洞がある。

キジル千仏洞は、新疆地区最大の石窟寺院で、敦煌の莫高窟に次ぐ規模の石窟で、中国古代仏教美術の宝庫である。全部で236個あるという石窟にはそれぞれ番号が付けられていて、その38窟は、比較的保存状態がよく、交脚弥勒菩薩や釈迦に関する鳥の絵などがあり、同時にいろいろの楽器の絵が描かれてい

て音楽洞ともいわれる。琵琶、横笛や阮咸(ゲンカン)、篳篥(クゴ)、篳篥(ヒチリキ)、銅拔(ドウハツ)という弦楽器、手太鼓などを持った菩薩が描かれている。篳篥(ヒチリキ)は日本の雅楽には欠かせない楽器といわれる。また、8窟には、五弦楽器として唯一現存している正倉院に保存されている「螺鈿紫檀(ラデンシタン)五弦琵琶」と同形の亀茲琵琶が描かれている。因みに、現在一般に使われている琵琶は、ほとんど4弦のものだそうだ。

キジル千仏洞と近い所のあるグズル・ガハ千仏洞には篳篥(クゴ)、篳篥(ヒチリキ)、四弦琵琶、排簫(ハイショウ)の亀茲音楽の主要4楽器を奏でている飛天が描かれている。特に、クチャ周辺の石窟にこのような壁画が多く残っていることから、もっとも音楽の盛んだった地域であったと思われる。中国・唐の玄宗皇帝や楊貴妃などが奏でた音楽にも、亀茲音楽は相当影響を与えていたとのことである。

唐では礼楽をつかさどる役所を伎といったそうだが、クチャの音楽をつかさどる亀茲伎というのがあったそう。ガシュガルの音楽は疎勒(ガシュガルの漢名(ソロク))伎、トルファンは高昌伎、インドの音楽は天竺伎などと言い全部で10伎があったという。

バスの乗り心地は日本の方が遥かに良いが、走行中に運転手達が流す音楽もすばらしいものが多かった。文化の程度は、高くはないが、音楽に関してはよいものがあると思った。

音楽以外で印象的だったこと一つあげると、たまたま、砂漠の真ん中でバスが故障して8時間近く居ざるを得なかったため、結果として、砂漠でのすばらしい朝日と夕日と満点の星空が満喫出来たことである。まさに自然の美しさ、雄大さにふれることが出来た。

注) 交脚弥勒菩薩 男女2体が両足を絡ませている菩薩

②⑥ 13年卒 大森 敏幹

小生は今年の9月で満88才(米寿)となる。年寄りには寒さが禁物で、風邪を引かぬよう用心して来た。2月も半ばとなり、梅の便りもチラホラ届いている。どうやら、この冬も無事越せそうな昨今である。

②⑧ 15年卒 須田 民三

沢井正君が11月25日85才にて急逝しました。彼は同期会には殆んど必ず出席してましたので特に淋しい必りです。年齢とはいえどん々々同期の桜が欠けて行きます。

「降る雪や 大正は遠く消えて行く」

③④ 20年卒 猪又 藤太郎

昨年春、旧制度最後の厚生省推薦による、春の叙勲に、勲四等瑞宝章を受章しました。これも皆様のおかげと感謝しています。同時期頃より不眠が続き、アリセプトを必要とする状況になって困っています。

③⑦ 24年卒 山口 輝夫

薬事法の改正に伴い、17年4月施行の新制度に向け、時々日薬連の場でお手伝いしてます。現役離れ4年目、「楽しく元気で」を実践すべく鋭意努力してますが、夫婦共々ともいかず、反省の日々ですが、年相応に健斗中です。

③⑧ 25年卒 深井 三郎

昨年、総会の際にお知らせした、「日本の新薬変遷史」が昨秋やっと完成しました。変化の激しい時代となり、その後も改訂の作業が続いています。初版の「今日の新薬」を出版してから今年で30年になります。

④⑩ 28年卒 眞船 恒雄

昨年のアインクラブ(40回卒)は古都鎌倉、山崎先生ご臨席のもと22名参加で楽しいひと時を。今年は宇奈月温泉。私の健康法は一万歩のWalk、ボケ防止にPC、心の癒しにカメラを持つての旅。因みに昨年は441万歩でした。

④② 30年卒 竹村 日出男

E-mail : h-takemu@td6.so-net.ne.jp

最近南江堂「今日の治療薬2004」を入手、その充実した内容に感嘆。全治療領の知識と薬の最新情報満載で、薬剤師の座右の書としておすすめ。ちなみに定価4600円+税です。雀百まで踊忘れずで行きましょう。

④③ 31年卒 玉生 良久

この4月に富山中部高校の昭和27年卒業生全員が70才に到達するのを記念して、古稀花見会がチンドンコンクールで賑わう松川ペリで催されます。楽しみです。ふり返ってみんな懸命に良く生きてきたと思います。

④④ 32年卒 高木 良造

古希を迎えた今、健康維持の為にトレーニングセンターに通い、ゴルフや旅行を楽しみ、時には一流の芸能文化に触れるべく、劇場や美術館に足を運んでいる。又薬剤師として、地域医療の為に、より信頼される調剤薬局を目指して、週に三日程働いている。

④⑤ 33年卒 湊 秀夫

昭和31年頃の薬学部の敷地外れに古い煉瓦造りの高い煙突があり、その上から敷地を四枚に分割して撮ったフィルムが偶然出て来た。写真は冬の山々を背景に研究棟、教室、薬草園など。15米程の煙突はザイル練習をした山岳部グラウンドでもあり新人が上で震えた所でもあった。嬉しく記憶が甦った。今は跡形もない学び舎。先日の集りで何人かの友に配った。

④⑥ 34年卒 川畑 耕祐

平成9年9月に製薬会社を定年退職後スーパーの薬局に管理薬剤師として週4日勤務しています。疾患別に相談を受けるとついつい定年まで勤務していた会社の製品を推売してしまいます。又万引対策に頭を悩ませています。

④⑦ 35年卒 橋本 喜信

E-mail : yh768jp@yha.att.ne.jp

合唱と仕事が趣味の私には、生涯現役が目標です。外国にもCROを設立しました。更には大学院の学生に創薬科学の講義が30年も続いております。健康維持の為に、海外演奏旅行を続けながら人生をエンジョイしています。

④⑦ 35年卒 伊勢谷 篤弘

E-mail : jimy518@yahoo.co.jp

八千代市自治会連合会役員として機関誌の編集、市医療計画アドバイザー、交流活動委員など重症の地方症にかかっており、お蔭で痴呆症は軽症ではないかと自己診断しております。

同期生箱根登山

(④⑧、36年卒)久保一夫

箱根湯本で「奥田四八会」(昭和36年卒の同期会)が開かれることになって、同期生4名で箱根登山を行いました。奥田四八会は、非常にまとまりのよい会で2年毎に各地で開催されており、今回も、平成15年7月13日(日)に全国から41名が駆けつけ、緑濃い箱根で心行くまで親交を暖めることができました。

翌7月14日(月)は、朝食後思い思いのコースに分かれて箱根を堪能することになりました。前夜の激しい雨も上がり、曇り空ながら涼しく、梅雨時としては、まあまあ天気でした。ゴルフ組は小田原湯本カントリークラブへ、観光組は彫刻の森、早雲山ロープウェイ、芦ノ湖観光船、成川美術館などへ、フリー組はガラスの森を見学した後小田原駅前の「魚国」で活魚昼食を堪能等とそれぞれ楽しみました。

私たち登山組は、埼玉から来た中嶋啓君と私、静岡の熊木健治君、愛知の金子良雄君の4人で、箱根外輪山の名峰・金時山に登って来ました。前夜の天気予報では、登山は無理かなと思いましたが、当日は雨が上って、バスで仙石まで行き、仙石バス停から歩きはじめました。乙女口からの結構な登りを若い(?)身の軽い同行者に引っ張られ、何とかついて行きました。乙女峠(標高1000m)あたりでは、右にはるかに芦ノ湖、左に一幅の絵のような雄大な富士の裾野、眼下に仙石原の緑の絨毯と山々、その中に点在する街を見下ろし、しばし疲れを忘れました。そこを過ぎると雲の中、眺望は得られませんでした。満開のヤマボウシの花や珍しいヒメシャラの木などが目を楽しませてくれました。頂上付近では岩の間に可憐な花があちこちに咲いて、同行の薬剤師さん(みんな薬剤師だが)

に名前を覚えてもらいました。シモツケソウ、オダマキ、ギボウシ等、いつも花の名前は忘れてしまうが、今度は先生の顔と一緒に思い出せるから大丈夫でしょう。

金時山の頂上は狭く岩場、ガスもかかり、標高は低いながら、ちょっぴり高山の趣を感じることができました。山頂着11:30分、金時娘から味噌汁をもらって昼食。登山者名簿に記帳したら、この日の1番登頂は5:02分とか。この山にはファンは多いらしく金時山のTシャツを着た数人が登って来ました。

箱庭というにはスケールの大きい仙石原を眺めながら、矢沢峠を経て仙石にくだり、温泉で汗を流して生ビールで乾杯、最初の一杯で生き返りました。小田原で「鰻寿司」(これが旨い)をつまみながら、若い頃の山歩き、これからの山歩きのことなど話しあいました。17時頃解散、それぞれの家路につきましたが、楽しく充実した1日でした。

また、箱根湯本の奥田四八会と翌日の同期会登山は楽しくリフレッシュした2日間でした。

(立山化成(株)顧問)

エベレスト街道トレッキング

... 最高峰へ30kmにまで迫る

(⑤⑩、38年卒)前田一郎

思えば15、6年ほど前だったろうか、ある雑誌で、トレッカーがヒマラヤの8000m峰4座を一望できるポイントに立っている写真を目にしてからというもの、自分もいつの日かそこに身を置いてみたいとの夢を抱き続けてきた。昨秋、その夢はもっと先にとっておくこととして、ともかくヒマラヤへのトレッキング旅行を実現できた。以下は、ツアー全行程のうち山で過ごした4日間の模様を摘記した

ものです。

なお、一行は医薬品業界の女性2名を含む総勢11名。我々山仲間独自でツアーを組み、平均年齢62歳(推定)。期間は10月25日～11月3日で、経路は成田(関空) バンコック経由 カトマンズ。

薬窓会首都圏支部メンバーは、川上 惇、中嶋 啓(ともにS36卒)及び前田(S38卒)それに大阪支部の肥田正孝(S39卒)の4名。

トレッキング第1日目(晴): いよいよ山への第一歩を印す日、カトマンズから20人乗りの飛行機で空中からのヒマラヤの眺めを楽しみながら30分程で登山基地のルクラ(2840m)に降り立った。国内のそれとは違うあたりの山容に見とれながら1時間余り休憩の後、今日の宿泊地バグディン(2620m)に向け、日本からのツアーリーダー、現地のガイドらと出発した。荷物はゾッキ(牛とヤクの交配種)が運んでくれ、トレッカーが背負うのはほんの身の回り品だけで、ゆったりと周りの景観を楽しみながら歩を進めることができた。途中、往き来するトレッカーの多さは想像以上で、そんな客を当て込んだものだろう、いかにも堅牢そうな石造りの建設中のロッジを4棟見かけたが、トレッキング隆盛の一端を垣間見た気がした。昼食をはさんだ後、出発から4時間ほどでバグディンに着いた。

夕食までの時間、皆思い思いにあたりを散策したが、この集落はエベレスト街道では主だった中継地点の一つらしく、ロッジが軒を連ね、色とりどりのテントが張られた幕営地ともども満員御礼の様子だった。トレッカーは欧米人が圧倒的に多く、しかも日本人のそれと比べて年齢層が幅広く、女性の姿が目立つ。加えて若いカップルも結構多い。この日の昼食、夕食は山中でのものとは思えないほど美味しく、勧められるままに皆おかわりをしていった。この状態が期間中

ずっと続いた。

トレッキング第2日目(快晴): 午前3時頃だったか、「星がすごいぞ」の声に起こされ外に出て夜空を仰いだ。何十年ぶりだろうか、久しく見なかった星空があった。しばらく息を飲んで眺めていた。朝は雲ひとつない快晴、ロッジ裏手の山の向こうに頂上付近を見せて聳える大きな山が時の過ぎるにつれて輝きを増していった。「ヒマラヤは星も大きければ、山も大きい」を実感した。きょうは、街道最大の集落ナムチェまで標高差800mを登る長丁場であるが、道中どんな景観が迎えてくれるのかと期待に胸を躍らせて8時過ぎロッジを後にした。歩きはじめて1時間余り、峡谷の奥に独特のヒマラヤ襞を描いた高峰がくっきりと姿を現した。タムセルク(6641m)である。鋭く、堂々と屹立している。己の足を大地につけて仰いだ最高峰である。今度の旅の終わりまで、どの嶺々よりも印象に残った巨峰であった。やがてサガルマータ国立公園の山域に入り、最初の集落で昼食。歩き始めて小一時間後、急流の上に掛かる深い吊り橋を渡っていよいよ急登にさしかかる。このあたりでも相変わらず人とゾッキの往来がはげしい。

登りの途中、谷を挟んだ左右の山の稜線が作り出す空間の遥か向うに、写真で見覚えのある形の山が眺められた。それがエベレストだった。写真に収めた後、歩きながら不思議な想いに捉われていた。ヒマラヤの広大な山域に引き比べれば実に狭いその空間にローツェ(8501m)でもなく、アマダブラム(6814m)でもなく、最高峰が配されてることを。「ああ、拝めた」と満足して引き返してもよし、その姿に勇気づけられ、さらに前進するもよし、そんな地点だった。空気が薄くなったのを感じながら、やっと登りきったところにある軍隊詰所を過ぎて、やがてナムチェに到着した。

大気が澄んでいるのだろう、日差しがきつく、昼間は長袖シャツでは暑いくらいであった。

トレッキング第3日目(快晴): このトレッキング中のハイライトが今日である。今朝も文句なしのヒマラヤ晴れに恵まれ、全員高地順応もよく快調に出発した。ナムチェの丘頂上に近づくにつれ気が逸ってくるのがわかる。やがて緩斜面に出たかと思うとアマダブラムが、さらに歩いて前方にも遮るものなくなるところでエベレストを中にクーンブ山群の名峰が次々に目に飛び込んできた。ほどなくこのトレッキングの最高地点(3900m)にあるホテルに着き、地図を手に飽くことなく展望を楽しんだ。タムセルクまではわずか6km、アマダブラムへは15km、そしてエベレストへは30km足らずであることを教えてくれる。1時間ほどでホテルを後に帰路についた。

この日の昼食は途中の集落クムジュン村で摂ったが、野外にシートを拡げ四囲の絶景を眺めながら蕎麦などに舌鼓をうつという贅沢なもので、この先ずっと忘れられない思い出となるだろう。

ナムチェのロッジに帰り着いたのは3時半過ぎだった。すでにあたり一帯は冷気に満ちていた。

明るくトレッキング第4日目も快晴の朝を迎えた。きょうは、ここナムチェまで2日間かけて上がってきた起点のルクラまで一気に下る。来しなに眺めた山々を振り仰ぎ、草花に目をやりして、脳裏に焼き付けながらルクラに帰還して、ヒマラヤトレッキングが終わった。

期間中、メンバーは食欲旺盛で誰一人として体調を崩すことはなかった。また、日本からシルバーボランティアとして現地に派遣されているT氏とのカトマンズでの夕食会のこ

と、トレッキング3日目ロッジへの帰途サーダー(現地ガイドのリーダー)の自宅に案内されお茶のもてなしを受けたこと、ルクラのロッジでトレッキング中ずっと同行した現地の人たち全員と酒を酌み交わしながら無事帰還を喜びあったことなどなど、思い出深い旅であった。

桔梗会便り

桔梗会へのお誘い

(㉔、41年卒) 深 田 和 代

一昨年(平成14年)友人に勧められて桔梗会に入会した私にとっては、参加することに意義があり、会員の皆さんの意欲的な向上心と好奇心には驚かされ、大いに刺激を受けています。

勉強会は月に1度、「シンプル免疫学」、「薬剤師のための実践英会話」(テープも使って)をテキストにしています。当番を決めての輪読で、当番は担当の範囲を勉強し説明します。学生時代を思い出しながら、不勉強な私ですが、ちょっと無理して頑張っています。そして貴重なアドバイスがあり情報交換もでき、いろいろ教えられることが多く、その上、勉強の前後の楽しい雑談にも惹かれて通っています。

時にはビデオを使ったり、講師を依頼しての講義もあります。昨年5月には健康日本21推進フォーラム事務局長の末木一夫氏^㉕の「免疫」についての講義があり、現在勉強中のところで大変参考になりました。また1月に行われたメンバーの佐藤さんの「活性酸素」についての講義は、電子スピン共鳴法、フリーラジカルと活性酸素、抗酸化物などの興味あるお話でした。そして4月には2年に1度の

一泊旅行（箱根）が予定されています。

少し転じて、薬学教育は国試の形態が変わってほぼ10年、4年制から6年制に移行しようとする時期にあります。薬学のどの分野においても社会からその必要性を求められています。今後どのような展開があるのでしょうか。また、高齢者社会を迎え、高齢者医療においても、クスリに対する関心はますます高まることでしょう。

薬と健康について気軽に話し合える場として、より一層楽しく有意義な会になることを望んでいます。皆様の参加をお待ちしています。

日時 毎月第3土曜日 PM1:30~4:30頃
(8月お休み)

会場 JR・地下鉄南北線王子駅
北とびあ8階

お問い合わせ

定留温子氏^{④⑧}まで

TEL&FAX: 0424-65-0206

E-mail: IZCT00435@nifty.com

100字通信 2

④⑧ 36年卒 川上 惇

E-mail: at-kawakami@blue.ocn.ne.jp

昨秋のヒマラヤトレッキングは天候に恵まれた。今年は2月にスイス・ベルピエにスキーツアーをした。ヨーロッパのスキー場は変化に富んでいる。雪質はよく、毎日晴天だったのでアルプスの山々が白く輝いて美しかった。

⑤⑩ 38年卒 宮澤 英雄

E-mail: hmmya@f2.dion.ne.jp

新しいこと、二つ。カミサンの影響で絵を描き始めた批評家から一転して生徒になり下がった。芸術家は多作はしない。一年に一枚をじっくり仕上げるつもり。もう一つ。犬を飼いたい。庭で遊ばせる中型犬が欲しい。

⑤② 40年卒 是枝 潤

合併で九十九里市に変わるようです。浜が気に入って永住を決めた私としては、ラッキー！って感じみたい。

⑤④ 42年卒 竹内 三千代

E-mail: mi.takeuchi@minos.ocn.ne.jp

今年は年女。小中高大学の同窓会が目白押し。ほとんどが職場をリタイアして第二の人生に。肩書きのない自分と向き合い夫婦だけの時間がグンと増える。富山の友人が発した「やわやわといこう！」という言葉が妙に心に残る。

⑤⑤ 43年卒 柿崎 直和

E-mail: kakizje7@daiichipharma.co.jp

湧き出るアイデアで、創造的な支部運営を期待します。この2年間に10以上も薬学部が新設されます。新設学部では斬新な構想と戦略を練っている筈。次回大会では、来賓から、母校の中長期戦略をぜひ、お聞きしたい。

俳写

花の散歩みち

(④③) 31年卒) 木谷 健一

鎌倉・安国論寺

JR鎌倉駅から徒歩18分。

日蓮が建長5年(一一二五)鎌

倉で布教の際、草庵を設けた跡と

伝えられ、山門を入った右側の祖

師堂脇に「立正安国論」を草した

といわれる法窟という岩穴がある。

桜の花が盛りを過ぎるころ、本

堂前の枝垂桃と海棠の花だよりが

届く。枝垂桃は花桃の一種、源平

枝垂で、1本の木に白色、うす紅、

紅色の花を咲きわけ、うす桃色の

海棠と妍を競っている姿は美しい。

見ごろは4月上旬。この寺には、

その他いろんな花木があり、季節

にアクセントをつけている。

祖師堂に日波をよせる枝垂桃



(㊦、28年卒)千原秀夫

第64回葉窓会ゴルフコンペ戦評

習志野CCと言え、かつてはかの尾崎兄弟が所属しサントリーオープンでゴルフ愛好者の目を釘付けにした名門コースですが、日東興業の破綻で最近はあまりその名を聞くことがなくなっていました。しかしゴルフ場としてはやはり名門の名残を残していることと、久々に千葉でということから今回幹事の布施さんの友人の紹介を頂いて第64回のコンペをここで開催致しました。

当初は30数名のエントリーがありながら多忙の会員が多く、結局24名7組での熱戦となりました。

戦いはプレーヤー間の戦いだけでなく難しいコースとの戦いで、その最終スコアは本会始まって以来の惨憺たる(?)もので、グロス100以下が㊥柿崎さんの93、㊧竹道さんの二人で、なんと8.3%と従来の20%以上という数字と比べて頂けばプレーヤー達の苦戦ぶりがお察し頂けたことと思います。

優勝は久しぶり参加の㊩諏訪さんがネット75で、2位はハンディキャップ15をものともされなかった㊥柿崎さんでしたが、今回特筆すべきは3位の何とご年齢80数歳の㊱宮崎大先輩で、ハンデがあるにしてもグロス113は先述の難しさからすればもうだれもが脱帽せざるを得ない数字でした。

熱戦後は恒例の表彰・懇親パーティで、笑いと拍手が絶えることなくいつまでも楽しい一時でしたが、名残を惜しみつつ次回を諏訪さんと川上さんに託して終宴にさせて頂きました。

平成15年10月30日、後期のコンペを27名・7組の精鋭でこれ以上のゴルフ日和はないという天候の下東京ベイエリアのシーサイドコース「若洲ゴルフリンクス」で開催しました。このコースは、ご存じのように東京湾の埋立地で東京都が知恵を絞った揚げ句作り上げたものと言われています。設計・監修はかの岡本綾子で日本女子プロゴルフの公式戦が開かれることでもご存じの方が多いと思います。しかし埋立地と言っても開場後すでに14年目で、コースはイギリスのスコットランドの呼称「リンクス」にふさわしく、三方を海に囲まれたための変化の多い風と深いラフ、狭いフェアウエーにウォーターハザードとその戦略性は折り紙つき、加えて京葉線や地下鉄有楽町線の新木場から5分という地の利の良さから、エントリー方法は抽選、倍率は強烈と言うことで従来当コンペの対象コースにしたことがありませんでした。今回エントリーが電話方式になったことから開催の運びになりましたが、やはり希望の日時は無理で月末になってしまいました。

さて久々に上がってくるプレーヤーが皆さん明るい顔だったのですが、それもその筈グロス100以下が12名、しかも優勝の㊥村上さんのネット73以下2・3位、7・8・9・10位、14・15位、17・18位、25・26位と夫れ々同ネットが並ぶという今まで見たことも聞いたこともない大接戦となりました。結局卒業年次で2位が㊲伊藤謙治さんで3位が㊴小国さんとなりましたが、小国さんはグロス82でベストグロスしかもなんとインは39という見事と言うほかない成績でした。

パーティは成績発表に伴って大先輩㊱宮崎さんからそれぞれ賞品授与が行われ、各賞ではもう拍手と歓声が止まるところがありません

んでした。

追記：今般小生の事務局退任の了承と、後任の事務局選任について議事が行われましたが小国さん等の発議で次回から⑤⑤宮澤さん、⑤⑤石橋さん、⑤⑤柿崎さんの若手3人による複数事務局が出来上がり、今後新しい息吹で同好会の発展が期待されることとなりました。また今回は平成16年4月中旬で正幹事：⑤③村上さん、副幹事：⑤⑤布施さんと事務局間で設営戴くことになりました。

終わりにりましたが会員の皆様、歴代の支部役員の皆様、長い間不行き届きの多かった私に絶大なご協力を賜り本当に有り難うございました。ご案内を差し上げるときいつもその一通一通に会員の皆様のお顔を思い浮かべて添書しておりましたが、今後それがなくなるということが最大の寂しさです。本会のみますますのご発展と、70回等今後のメモリアル大会時には名誉会員(?)としてぜひパーティに出席させて戴くことをお許し願いたいと存じます。付記して御礼と致します。



100字通信 3

⑤⑤ 43年卒 中本 咲代
昨秋横浜から鳥取に戻りました。故郷の懐かしさにどっぷりつかりのんびりをきめこんでいる昨今です。これからは福祉の面で社会に貢献できればと考えております。くれぐれも逆の立場にならないようがんばります。

⑤⑥ 44年卒 濱島 健二
E-mail : hamajima@helen.ocn.ne.jp
メールアドレスを変更しましたのでよろしく
お願いします。
hamajima@helen.ocn.ne.jp

⑥① 48年卒 中川 輝昭
E-mail : n-teruaki@jcom.home.ne.jp
25年ぶりの東京勤務です。これまで、富山医科大学薬科大学病院、氷見市民病院で病院薬剤師として働いてきました。平成15年8月から、関東の調剤薬局チェーン「薬樹」に勤務することになりました。よろしくをお願いします。

⑥① 48年卒 中西 憲幸
飲み屋で知り合った仲間と年に数回江戸を歩いています。雑誌「歴史街道」の3月号に「団塊の世代のビジネスマンが歩く江戸」のタイトルで紹介されました。昨年秋に箱根に行き、旧東街道を歩いた時の写真や活動報告が載っています。ご一読アレ。

⑥④ 52年卒 鹿田 謙一
E-mail : shikada@nissanchem.co.jp
薬学関係の人なら唯でも知っている薬事法が平成17年4月から大きく変わります。現在会社で薬事を担当していますが、今回の改正の意義とビジネスへの取り込み準備のための社内説明会等で、この1年はくたびれそうです。

⑦① 58年卒 遠藤 義之
昨年、子犬(品種：パピヨン)を飼い始めました。犬は人の行動や話を大へん良く見たり聞いたりしています。ストレスの多い社会の中で疲れを癒す良薬となります。今後の高齢化社会で動物との関係は大切です。

⑦⑦ 平成2年卒 増本 純也
E-mail : masumoto@hsp.md.shinshu-u.ac.jp
米国ミシガン大学へ研究渡航したため、2年間実家の東京へ住所を移しておりました。この度帰国し信州大学へ復職致します。同窓の皆様にはお世話になると存じますが、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。